

事物とその環境 アリストテレスから生態的存在論へ

Objects and Their Environments: From Aristotle to Ecological Ontology

バリー・スミス | 訳-柳澤田実

Barry Smith / trans. Tami Yanagisawa

1 イントロダクション

本稿は、空間と空間的事物に関する理論に貢献するものである。その出発点は存在論の下部領域であるが、存在論とは「何があるのか」に関する学問として定義される。すなわち存在論とは、存在のあらゆる領域における事物 (object) の多様なタイプとカテゴリー、そして関係性に関する学問である。より明確に述べるならば、本稿は、アリストテレスが『カテゴリー論』と『形而上学』のなかで提示した思想から始める。アリストテレスの存在論的思想は近代の科学的発見に先立って発達したものであるが、彼が日常的な実在に属する事物や関係性にアプローチした際の存在論的重要性は、今日の科学者が物理学的事物にアプローチする際に伴われる重要性に匹敵するからである。本稿は、事物や関係性といったこれらの常識的なものについてアリストテレスが述べたに違いない内容が、より形式的な用語に翻訳されことによって、現代の存在論にとっても有益であることを示す試みである。より正確に述べるならば、アリストテレスの思想が、日常の実在の社会制度的な構成要素に関する、精密な理論に貢献することを主張したい。ここで言う日常の実在とは、人間の行動のセッティング (setting) であり、これこそが本稿の主題である。

現代の哲学者たちが存在論に関心を向ける際、彼らは、たいていの場合アリストテレスではなく、スタンダードなモデル論的存在論として用いられる集合論的存在論から始める。集合論的存在論は、世界を原子論的な用語によって捉える。すなわち、それは、そこから連続的により高次

な集合論の対象が構成されるような、原子の最も低いレベル、原-要素 (urelements) を仮定するのだ。これに対して、本稿が擁護する存在論へのアプローチ方法は、原子ではなく、通常の日常的活動においてわたしたちを取り巻いているメゾスコピック (=中間的)[1] な事物から出発する。それは世界を、具体的かつ個別な原子からなる存在として捉えるわけではなく、抽象的な (ひとつあるいは任意の段階から成る) 「性質」や「属性」として見るわけでもない。むしろ世界はあなたと私によって、あなたの頭痛と私のくしゃみによって、あるいはあなたの闘争と私の戦いによってできあがっているのである。

本稿は4つの主要部分に分かれている。第1部はアリストテレス自身の存在論の根幹である実体 (対象、事物、人物) と偶有性 (出来事、質、行為) の存在論を描き出す。第2部はより専門的な部分で、アリストテレスの理論の核心にある幾つかの概念をやや形式的に分類することに割かれている。これらのより専門的で詳細な議論は、フッサールにインスパイアされた1997年の拙稿において、より完全なかたちで発表されている[2]。この1997年の論稿もまた、アリストテレスの存在論の主要な構成要素である普遍とカテゴリーに関する理論を扱っている。第3部は、存在論を空間的に延長しているものの範囲にまで広げ、とりわけアリストテレスの場所論を扱っている。そして第4部と最後の部分では、アリストテレスを超えて、人間の行為の日常的世界を構成する環境の存在論について説明している。

2 実体と偶有性に関するアリストテレスの存在論

2.1 実体

アリストテレス存在論の核心は、実体 (事物や身体) と偶有性 (質、出来事、プロセス) に関する理論である。実体の例として、アリストテレスは、第1